

「疎外感」を抱くがゆゑに…（福田和也『乃木希典』）

「ますらをの／悲しき命／積み重ね／つみかさね護る／大和島根を」（三井甲之）

乃木希典の殉死から一日後にあたる大正元年九月二四日、田中智學の主宰する《立正安国会》（《國柱會》の前身）は、富士山を望む静岡県・三保の最勝閣において「乃木大將追弔大法會」を営んだ。この法会において、我が曾祖父の長兄にあたる金子彌平は、乃木との浅からぬ因縁ゆゑに、智學の高弟・山川智應とともに発願主を務めた。

彌平が乃木の知遇を得たのは、乃木が台湾総督であつた時期らしい。日清戦争中、軍属として営口の民政業務に携はつた彌平は、三国干渉の後に同地を離れ、新設されたばかりの台湾総督府に奉職してゐた。だが、彌平は、乃木の台湾総督免職より一月ほど前に総督府を辞し、実業界に身を投じた。「純直にして至誠」といふ山川の評から想像するに、乃木と同じく、新植民地のドロドロとした実態に絶望したのかもしれない。ただ、その後も両者の交りは保たれ、日露戦争中も、第三軍司令官（乃木）と安東県市政準備委員長（彌平）として、何らかの関係があつたやうである。

乃木と彌平とを結びつけたものは、いつたい何であつたのだらう。山川は、「氏の至誠の將軍と相感通せるところありしに由らずや。」と述べてゐるが、乃木には「至誠」といふ言葉で括りきれない「何か」がある。

福田氏は、乃木の生涯に付きまといふ「疎外感」に眼を向けてゐる。——厳格に過ぎる父親との関係、子供仲間における間の悪さ、戊辰戦争への不参加がもたらした朋輩との亀裂、萩の乱における裏切りと不評、西南戦争における軍旗の喪失、専門知識の習得に終始したドイツ留学…。——その「疎外感」ゆゑ、乃木は豊かな詩想を育み得た。また、西南戦争後、紅燈の巻での遊蕩に耽つた。このあたり、自らもまた「蕩児」であるらしい福田氏だからこそ描き得る乃木像と云へよう。

ドイツ留学後、乃木は豹変する。帝国陸軍の「徳義」を体現しようとして決意し、それを実行した。禁欲的であるのではなく、禁欲的であらうとする。——福田氏は、さういふ乃木の覚悟に胸打たれてゐる。もちろん、欲望の解放を是とする近代社会において、そのやうな生き方は主流たり得ない。それどころか、不気味でさへある。けれども、近代社会に「疎外感」を抱く乃木は、生まれたばかりの帝国陸軍を、ひいては明治国家を、近代社会の頹廢から護るために、「聖人」たることを自らに課したのである。

さうした乃木について、「明治時代を生き抜いた人間の中でも他に類例がない。」と福田氏は云ふ。だが、本当にさうだらうか。私には、彌平もまた、同様の覚悟を抱いてみたやうに見える。——何度も奉公先から脱走した少年は、長じてアジア復興といふ理想を掲げたが、現実には挫折を繰り返した。また、乃木同様に詩作を好んだ。そして、晩年に辿り着いたのは、個人の安心立命よりも日本国の「理想」を前面に押し出した「日蓮主義」であつた。

いや、彌平だけではない。明治国家を黙々と護り続け、草莽に姿を消した「悲しき命」が少なからず存在したことを、私たちは忘れるべきでなからう。

（かねこむねのり・京都大学研修員・近代日本精神史）